

小出稚子 Noriko Koide

《揺籠と糸引雨》オーケストラのための (2022)

*Swaddling Silks and Gossamer Rain* for orchestra

朝吹真理子の小説「TIMELESS」を元に作曲。邦題の揺籠（英題：おくるみ）は養蚕の繭を、糸引雨は文字通り糸のような雨と蚕の出す糸そのものであるタンパク質の細い繊維を表している。

ここ10年ぐらいことあるごとに境い目のことを考えてしまう。生と死の境目、昼と夜の境い目、他者と自分、正常と異常、うどんと素麺、子どもと大人、金持ちと貧乏、暑いと寒い、男と女などなど。考えるほど世の中に境い目という境い目は存在しなくて、そこら中に曖昧で不規則なグラデーションがただただ存在しているように思える。

以前書いたオーケストラ曲「南の雨に耽る」では、環境の中に溶けていってしまう個を描いてみたー以前住んでいたジャワの高温多湿の空気や降り頻るスコールの中で思考停止になり環境に埋没されていった感じを再現しようとしたーのだが、今回の「揺籠と糸引雨」では最初から中心に個は存在せず既に境界線や輪郭は溶け出していて、それはもはやどうでもよくて、たまたま風が吹いたので吹き溜まりのような部分に集まってきた音やメロディがそこにあり、それらがなんとなく寄り添っていく、そこでふとエモーショナルになったりならなかったり、たまに雨が降ったり止んだり。

朝吹さんの言葉をお借りすると、以下のようなもの描きたかったのです。

「わずかな風で吹き寄せられた木の葉とか、なんとなく潮目に流されていっしょになったクラゲとか。そういう感じの、ずっと寄ってまた離れて、というような固定的ではない人間の情けがあるのではと思います。寄り添いあったり離れたりするのが人らしいなと思うんです。」

(monthly magazine 波 朝吹真理子『TIMELESS』刊行記念対談 六本木に重なる四百年前の麻布が原 磯田道史×朝吹真理子 より)

小出稚子